

「葉桜の季節に君を想うということ」 歌野晶午著 情報工学科2年 三原 瑚桜

本著は2004年のあらゆるミステリーの賞を総なめにした長編小説である。著者の歌野晶午は、事件のリアリティよりも謎解きのロジックを重視した、いわゆる新本格と呼ばれるジャンルでデビューした推理小説家だ。新本格作家は魅力的な事件を構築することや、最後の瞬間まで読者をだますことに心血を注ぐ。すべては読者を唸らせるため。1980年代に新本格ムーブメントが起こって以来数々の名作が世に放たれたが、中でも本著は新本格を代表する作品の一つとして挙げられることが多い。

この本のあらすじを紹介しよう。自称「何でもやってやろう屋」の元私立探偵・成瀬将虎は、同じフィットネスクラブに通う愛子から悪質な靈感商法の調査を依頼される。そんな折、自殺を凶ろうとしていた麻宮さくらと運命の出会いを果たして、事件と恋の物語が動き出す。

将虎はあるときはガードマン、あるときはパソコン教室の講師、あるときは映画のエキストラになって、三つ四つの顔を使い分ける生活を送る。人の一生なんて短いから、やれるときにやりたいことをやってしまおう。というモットーを掲げる、バイタリティにあふれた人だ。色々な業界に足を踏み入れてきた将虎は、以前にも事件に遭遇したことがあるらしい。本著のメインは靈感商法事件だが、ページを進めると、将虎が過去に関わった二つの事件が徐々に語られ始める。

それに加え、靈感商法に身を墜とした主婦の話や、さくらとの恋物語も同時進行的に描かれる。物語は残りページ数が心配になるほど、それぞれに発展してゆく。そして、一見つながりの無いこれらの事件がただひとつの真実に収束するラスト三章、読者は驚きと感動の渦にのみこまれる。私は本著を読み終えるといつも、葉桜の木漏れ日が脳裏に映る。

将虎がパソコン教室の生徒・安さんに頼まれて調査していたある人物の現在について、事実を伝えるか思い悩んだ結果、ありのままを話すことに決めたシーンがある。将虎は「美化した嘘をつくことは、安さんを愚弄することになるような気がした。」と語る。相手のためを思って秘密にすることは、優しさではなくその人をないがしろにしている気持ちの表れではないのか。この問いに対し、読者はどう答えるだろう。謎解きだけでなく、こういった将虎の人生哲学というものが随所に見られることも、本著の魅力だと思う。

新刊のご案内（その2）

【校長先生からの推薦図書】

『友だち幻想 人と人の“つながり”を考える』

菅野仁著

【学生支援センターからの推薦図書】

『大切な人を亡くしたあなたへ』

坂口幸弘著

『学校を変える いじめの科学』

和久田学著

『いじめ加害者にどう対応するか』

斎藤環ほか著

【各学科の先生からの推薦図書①】

『デジタルファブ리케이션とメディア』

三谷純ほか著

『Ansys Fluentによる計算解法』

伊東章ほか著

「アルジャーノンに花束を」 ダニエル・キイス著 小尾美佐訳 情報工学科1年 恒川 向日葵

もっと賢くなりたい！

そう思ったことがある人も多いのではないだろうか。

この物語は知的障害を抱えるチャーリー・ゴードンが書き記す“経過報告”として描かれている。チャーリーは賢くなりたいという思いが強く、向上心も十分にあった。ある日、そんな彼にある脳手術の話がやってくる。その手術が成功すれば知能が非常に高くなるとされており、実際にその手術を受けた白ネズミ、アルジャーノンの並外れた賢さを目の当たりにし、チャーリーはすぐに手術を受けることを希望した。

手術後、彼の知能はとてつもないスピードで向上していく。多くの人が子どものころから長い年月をかけて得ていく知識や経験をももの数か月で追い越し、ついには天才と称されるまでになる。さまざまな国の言語を習得したり、多数の研究に携わったりと彼の可能性は限界など知らないようであった。しかしそれゆえに、地位や名声に執着してしまう人間に嫌悪感を抱き始め、障がい者に対する世間からの扱いがひどいものであるということや、社会の汚さや虚しさに気付いてしまうようになる。

しかし一方では、アルジャーノンに奇行がみられるようになり、知能の向上が一時的なものであるとわかった。ここから物語の流れは大きく変わっていくのであった。

このタイトルについてだが、本を読み進めていっても意味が分からず、理解できないまま私はこの本を読み終えてしまうのだろうかと思わず悔しさのようなものを感じつつあったのだが、最後の一文で私は衝撃を受けた。そして読み終わった今、さまざまなことを考えさせられることとなった。

この作品はすべてチャーリー視点であり、彼が体験したことや感じたこと、考えたことなどが具体的に書かれているため、感情移入というよりも、もはや自分の中のどこかにチャーリーがいるのではないかというような感覚さえ沸き起こってくる。この本を読んだことがない方には、この感覚はあまり理解していただけないかもしれない。しかし今、この図書委員は何を言っているのだろうかと思ったあなたにこそ読んで欲しいと心から思う。

新刊のご案内（その3）

【各学科の先生からの推薦図書②】

『演習で学ぶ MATLABによるディープラーニング』
 『英語で学ぶ 制御システム設計』
 『機械システム学のための数値計算法 MATLAB版』
 『実践ロボ制御』
 『機械系教科書シリーズ CAD/CAM』
 『人工衛星・惑星探査機のための宇宙工学』
 『磁性複合材料 圧粉磁心とボンド磁石』
 『省エネモータの原理と設計法』
 『磁気工学の基礎 I』

吉富康成ほか著
 余錦華ほか著
 平井慎一ほか著
 平田光男ほか著
 望月達也ほか著
 竹ヶ原春貴ほか著
 田島伸著
 森本茂雄ほか著
 太田恵造著

「儂い羊たちの祝宴」 米澤穂信著 物質化学工学科1年 戸井詰 桃佳

突然だが、浮世離れした世界で生きるお嬢様たちを思い浮かべてみて欲しい。彼女たちはとある大学の読書会サークル、「バベルの会」に所属している。それは、教養と品格を兼ね備えた彼女たちが集まって本を読み、意見を交換する会、らしい…

「儂い羊たちの祝宴」は、直木賞受賞の「黒牢城」や、最近アニメが放送された「小市民シリーズ」、京都アニメーションの「氷菓」で知っている人も多いであろう、米澤穂信の暗黒ミステリー短編小説だ。「小市民シリーズ」や「氷菓」を見た、または読んだことがある人なら分かると思うが、米澤穂信は青春ミステリー・日常ミステリーにおいて「日常の小さな謎」を取り扱っているのが特徴だ。しかし、「儂い羊たちの祝宴」は、全5つの邪悪な事件が収録されているイヤミス（読後、嫌な気持ちになるミステリーのこと）となっており、それぞれが独立したストーリーを展開していく作品となっている。恐るべきはそのラストの一行だ。ある程度展開が分かかってきたところで、予想だにできなかった衝撃の事実が、最後の最後の一瞬で我々の背筋を凍らせてくる。断言しよう、それはもう癖になるほどの一撃で、今まで感じたことのない恐怖が、衝撃が、あなたを震撼させるだろう。特に「玉野五十鈴の誉れ」は最高だ。お嬢様が料理下手な従者に教えた「ある何気ない言葉」が、最後のたった一行で恐ろしいものへと変化し、頭から離れなくなってしまう。純粋な悪意に満ちた、残酷で残酷な毒々しい事件の数々、しかしその余韻が不思議と心地よく、読む手を止められない。

浮世離れした世界の彼女たちの考えは、到底小市民の我々に理解できるものではない。ましてや、彼女たちに共感できる人は少ないだろう。しかし、理解できなくて気持ち悪いのに、何故か読んでしまうのがこの作品だ。最後の衝撃を堪能するのもいいし、その後の余韻に浸るのもまたいい。更に分かる人にしか分からない伏線が張ってあるのも、この作品の魅力の一つだろう。とにかく、『味わえ、絶対零度の恐怖を。』

新刊のご案内（その4）

【各学科の先生からの推薦図書③】

『地図とデータで見るグローバリゼーションの世界ハンドブック』
 『もういちど読む山川世界史PLUS アジア編』
 『もういちど読む山川世界史PLUS ヨーロッパ・アメリカ編』
 『世界を変えた科学史 2600年のサイエンスヒストリア』
 『科学・技術の歴史が一冊でまるごとわかる』

ロラン・カルル工著
 木村靖二ほか著
 木村靖二著
 三澤信也著
 白鳥敬著

編集後記

図書館だより第82号に執筆いただいた皆様ご寄稿ありがとうございました。今年度は図書館もコロナ以前の利用状態に戻り、ひと安心していただいていたところで、この冬はインフルエンザの大流行で心が休まらないですね。でも、図書館は静かに読書や自習を行えますし、消毒用アルコールの設置、常時換気、毎週清掃、返却本を全て洗浄水で拭くなどの措置を施していますので、今後も安心して図書館をご利用いただければと思っています。



奈良高専
National Institute of Technology (NICTE) Nara College

奈良工業高等専門学校 図書館

〒639-1080 大和郡山市矢田町 22

TEL 0743-55-6015

URL <https://www.nara-k.ac.jp/nncit-library/>



奈良高専図書館